

# マンガプロデュースコース

## 2016年度 試験科目

公募制推薦入試

一般入試A日程

- 共通学力試験 (P.003~)
- 論述

## 前年度からの変更点

- 一般入試A日程の「マンガ学部共通イメージ表現+文章表現」をとりやめます。
- 一般入試A日程に「論述」を設けます。

## ● 共通学力試験

P.003

## ● 論述

**出題意図：** 「原作」の場合は、物語を創る力、キャラクターを造形する力、発想の新鮮さに加え、さらにマンガとして完成した段階での仕上がり感をどこまで持てるかということで、ラフネームを作る力、「編集・企画」では、企画力、発想力、独創的なアイデアを作り出す力、さらにそれをプレゼンし、実現していく力、「評論」では作品を読み解く力、分析する力、それを自分なりの表現にどう結びつけ、どう構成できるかをチェックします。いずれも上手な文章や絵である必要はありませんが、読んでもらおうとする相手に読みやすく、わかりやすく伝わるように心がけてください。

## 2015年度 公募制推薦入試 試験問題

**時間：** 3時間

**支給素材：**

**問題：** 下の与えられた3つの課題から1つを選び、そのテーマにそって1,200字程度で論述しなさい。また、原稿用紙の  欄に選択した課題の数字を記入しなさい。

● 原稿用紙	1枚
● 下描き用紙 (B4)	1枚

### ① 原作領域

次の3つの要素を入れて、マンガ原作を作成しなさい。

- ・ 気象衛星
- ・ 自分探し
- ・ 30cm定規

### ② 編集・企画領域

現在プロで活躍しているマンガ家を想定作家として、歴史上の実在する人物を主人公とした連載マンガの企画を考えなさい。

### ③ 評論領域

商業的に成功しているマンガ作品を1つ選んで、その作品に登場するサブキャラクターの作品内での役割と魅力について論述しなさい。

ある日、私が帰宅すると自宅がみごとに全壊していた。どうやら何かが空から降って来てそのまま我が家に激突したみたいだった。しかしこれほどの大事故にもかかわらず騒ぎになっていない所を見ると、やはりここが辺境の山奥だと改めて実感する。何にしてもどこかの誰が建てて三年にもなっていない我が家を見るも無残な姿にしたのか調べることにした。

見た所によると落下物はどこかの気象衛星の様であった。詳しく調べようとするとうやうや先客がいた様である。

その先客はとても変わっていた。まずはその見た目だ。この冬山にいるにしては軽装な服装であった。具体的には南国のビーチで着る様なワンピースと靴である。そして用紙は雪の様な肌に星の色の紙、瞳は七色に輝いていた。それよりも彼女(?)の行動である。彼女は三十センチ程の定規で落下した気象衛星の大きさを測っていた。全体の大きさだけでなく書いてある文字、ボルト、機体の亀裂等まるで気象衛星の全てを測っている様だった。それを全てぶ厚いノートに書き記していた。

しばらくして気象衛星は測り終え次はクレーターを測り出した時、彼女はこちらに気が付いた。彼女は虫の居所の悪そうな顔をしていた。私はいたたまれず彼女に何をしていたのかを聞いてみた。彼女は眉間にシワを寄せ気象衛星を指差しながら「あれを測っていた。」と返答した。しばらく沈黙が続き、また質問をした。「何故測る必要があるのだ？」

すると彼女は「自分を知る為だ。」と答えた。私がきょとんとした顔をしていると彼女は続けた。「私には自分が何者なのかわからないんだ。いくら考えてもわからない。だから他のものを知ることで自分を知りたいんだ。」と少し苦しそうに答えた。私は「自分が何者かなんて誰にもわからないさ。わかった気にいる奴こそわかっていない場合が多い。だから気にすることもないだろう。」と彼女に言った。彼女は七色に輝く瞳をぱちくりさせながら「お前、自分が何者かわからなくて気持ち悪くないのか。」と聞いてきた。私は「結局のところは自分が何者かなんて自分で決めることだ。それよりも大切なことは自分がこれから何者になろうとする方だと俺は思うよ。」と、まるで人生が何なのか知っているかの様に答えた。彼女は眉間にシワを寄せながら顎に手を当てて考え込んでいた。しばらくして彼女は「まあそれもそうだな。」と言いポイっと定規を投げ捨てた。

その後私は彼女と水筒に残っていたコーヒーを飲みながら語り合った。私は彼女に「君はこれからどうする。私はこれから麓の町まで行くが来るか。」と聞いた。「ついて行くよ。」と彼女は笑顔で即答した。その時の笑顔は太陽よりも輝いて見えた。そして私達は残骸となった我が家を後にした。

## 論述 ① 原作領域

### 作品評価

ストーリーの構成要素として使用する「気象衛星」「30cm定規」「自分探し」の3つが、物語の筋に無理なく絡められています。特に「自分を  
知るために、自分以外のものを測る」ための定規として設定したところが、ユニークな発想で感心しました。導入部のインパクトから爽快感のあるラストへ紡いでいく構成に若者らしい瑞々しさがあり好感が持てます。

ここは精華高校。山の上に位置し、緑に囲まれるとてもどかな学校だ。山田元気はそんな精華高校に通う受験戦争まっさかりの高校3年生。親が見つけた名前とは無慈悲なもので、元気という名前とは180度反対の暗く無口な性格をしていた。元気の性格は成長すると共に暗くなっていき、親も心配していたが時間が過ぎるとそれがあたりまえのようになり、心配する者はほとんどいなくなっていた。

精華高校は夏休みに入り、元気は勉強するわけでもなく家で無駄に時間を過ごしていると、幼馴染の橋本美香がやってきた。美香は元気の部屋に入るなり、黒く綺麗な髪をなびかせて「元気。本当にこのままでいいの？」と言葉を落とした。元気はテレビから美香に目をやり、言った。「何をやっても変わらないさ。」美香はどうしても変わってほしい理由があった。美香は机の上の30cm定規を見つけると、それを手にもち、もう片方の手で元気の手をつかみ「行くよ」と言い、外へ引っぱって行った。

元気と美香はバスに乗りどこかへ向かっていた。「どこに向かっているの」と元気がきくと、「着けばわかる」と言い、それから美香は口を開かなかった。バスは山道をころがるようにして二人をある場所へ連れていった。二人はバスをおり、少し歩くとそれは顔を出した。バスが二人を連れていったのは、動物園だった。

元気は美香の顔を見て、「どうしてここに来たの」という顔をしている。美香は動物園に昔を重ねていた。そして、元気に語りかけた。

「ねえ覚えてる？昔は二人でここに来て一緒に遊んだよね。昔の元気はどこへ行っちゃったの？昔は私のまわりで気象衛星みたいにいろんな表情を見せてくれたのに。」美香は元気に見えないように悲しい顔をしたが元気にはそれが見えていた。しかし、元気には美香に返す言葉が見つからなかった。なぜなら、元気にも自分がなぜこんな風になってしまったのかわからなかったからだ。元気は成長していくと共に、周りのすべてがわからなくなってしまった。周りがどんな風に考えているのか、回りが自分の悪口を言っているのではないか。思春期によく起こる、至極あたりまえのこの現象で元気は心を閉ざしてしまったのだった。

「周りが見えないんだ」と美香が言うと元気は下を向いてしまった。美香は元気のほうを向くと、手に持っていた30cm定規を元気の目の前に出して言った。「30cm。30cmだけ前を見るの。前を見ようとしないのに周りが見えるわけじゃない」元気は言われた通り前を見ると、そこはそれまでとは、全く違う景色だった。毎日のように見ているはずの美香の顔も久しぶりに見た気がした。涙がこぼれそうなのを我慢して元気は「ただいま」とつぶやく。

元気の目はいつもより30cmだけ前を見ていた。その30cmは元気に前を進ませる勇気をあたえた。元気は前を向き自分探しに歩き始めるのだった。

## 論述 ① 原作領域

### 作品評価

短い作品の中で、主人公の内面を丁寧に描くことができている。「30cm先のものさ見えなくなっている閉塞感」というアイデアは具体性があり、主人公の目前に定規を突きつけているヒロインの凜とした姿がイメージできました。定規というアイテムの特性を上手く利用し、物語のテーマを明確にすることに成功しています。